



医局だより

がん研有明病院 乳腺センター

春山 優理恵／上野 貴之



がん研究会有明病院は日本初のがん専門機関である癌研究会を前身とし、1936年に大塚に癌研究所並びに附属病院を開設、2005年より有明に移転し現在に至ります。乳腺外科としては1988年より外科から立ち上がった乳癌治療の研究グループが始まりでした。

当院の乳腺外科は国内でも早い時期から診療科として独立しており、2012年より従来別部署だった乳腺外科と化学療法科の乳腺内科が乳腺センターとして統合されました。現在、乳腺センター長に大野さん、乳腺外科部長に上野さん、乳腺内科部長に高野さんを据え、乳腺外科19名、乳腺内科8名の総勢30名で日々乳癌患者さんの診療にあたっています。ここで多くの読者の方より「(執筆者、卒後10年目)大野先生に

『さん付け』?けしからん!」お叱りを受けかねませんが、当センターでは役職問わずお互いを『さん付け』で呼び合うことが一つ重要な文化となっております。

乳腺外科では2021年1217件の原発性乳癌手術を行い、乳腺内科は年間39件の企業治験、3件の医師主導治験への参加を行い、乳腺センター全体として精力的に取り組んでおります。総勢30名の大所帯ではあるものの、日々の日常診療を行いながら、安全に職務を完うするには業務の効率化、各医局員の負担軽減を見据えた働き方改革が重要であります。乳腺センター全体でのカンファレンスの他に、外科は3チーム、内科は2チームにそれぞれ分かれ、チームカンファレンスを行い、そこには内科・外科だけでなく、

医局だより

病理診断医、放射線科医、超音波技師など多職種を交えて診療方針について討議を重ねております。また2020年より業務負担の軽減化を目的にドクターズアシスタント(DA)を導入、現在4名のDAさんにクリニカルパスなどのオーダーリングの入力代行を担って頂くことで、医師がより診療に専念できるような体制となっています。

さて、乳癌診療の現場では日々改革が続き、患者さんに説明する内容なども膨大になり、限られた診療時間を圧迫しつつあります。がん研の特筆すべき点としてワーキンググループや多職種カンファレンスが盛んであるという点があります。その様な他部署との連携活動を通じて『妊孕性サポートブック』、『遺伝学的検査の説明動画』などが作成され、日々の診療の負担を減らすだけでなく、患者さんのニーズにも確実に応えるべく診療体制を構築しております。

また、その様な活動の基礎として、乳腺センター内での研究グループがあります。これは各々が興味を持つテーマに対してチーム(薬物、手術、診断、病理、サバイバーシップ、遺伝、モレキュラー)に分かれ、内科・外科の垣根をこえた研究活動を行っております。そこで議論された内容を学会発表に活かし、サブスペシャリティを磨き、臨床研究の提案などを経て、日々の日常診療に還元しております。院内臨床研究も郭清省略試験を始め、AIを用いた研究など多岐に渡り活発に行われています。

私たちは以前より、多くの若手ドクターにがん研での乳癌診療について学んでいただくため、『アカデミア』(1週間の研修プログラム)を開催しております。昨今のコロナウィルス流行感染により、一時期開催が難しいこともありました、



現在また通常通り行うことが可能になりました。また、私たちは2020年より新しくWEBセミナー『GRACEセミナー』を開始、現在年2回ペースで開催し、その時々ホットな話題について、当センターの実績やセンター内で議論された内容を踏まえた治療方針について発信を行っております。(詳しいご案内は当センターのFacebookをご覧ください)がん研の診療に興味のある方はぜひ私たちにご連絡ください。見学や研修、当院での勤務など、様々な形で一緒に乳癌診療にあたっていければと思っております。

2023年には大野さんを学会長に据え乳癌学会が開催される予定です。私たちは、リサーチグループを軸にプログラム構成を乳腺センター全体で行っております。乳癌学会にご参加いただく皆様にとって学びになり、乳癌診療の未来について熱く議論できる学会を目指し、一丸となって鋭意準備を進めております。皆さまのご参加をお待ちしております。

最後になりますが、がん研の診療に関わってくださる全ての方、連携病院の先生方、OB・OGの諸先生方にこの場をお借りして感謝申し上げます。今後ともよろしくお願いいたします。